

# ランドスケープのちから

## 05. 日本庭園

株式会社ランドスケープデザイン

植野 紉 / 小池 孝幸

### ユニバーサル・テクニクとしての日本の作庭技術

ニューヨークのセントラルパークを手掛けたF.L. オルムステッドが、世界で最初にランドスケープアーキテクトの職能を名乗ったことが端緒の一つとなる近代ランドスケープデザインの波は時を経て、1970年代、日本にG.エクボやL.ハルプリンなどの作品紹介が届き始め、その後米国を中心としたランドスケープの潮流が展開されました。当時業界では、もう造園は古い、これからはランドスケープであるという極端な議論さえ交わされていたことを記憶しています。大きな時流は、公益社団法人日本造園学会が、1994年に機関誌名称を、「造園雑誌」から「ランドスケープ研究」へと改題することにまで波及しました。そうした時代の変革の流れから約半世紀経た現在、日本国内で建設される様々なランドスケープ空間を見渡してみると、特に面積的に限られる日本でのランドスケープ空間を成立させているのは、古来から伝わる日本庭園を頂点とする伝統的作庭技術であることに気付かされます。近代ランドスケープデザインに一方の軸足は置きながらも、もう一つの軸として日本の作庭技術が我々ランドスケープアーキテクトを支えています。ここ

では、伝統的作庭技術を駆使した2つの再生の日本庭園を紹介しながら、作庭時だけでなく、時を経ても美しさを維持し続けること、更には昔の姿を取り戻す造園技術までもが、世界に誇れる日本の文化であることに触れていくこととします。『フォーシーズンズホテル京都』では、敷地に残された、平重盛の山荘「積翠園」をレガシーと捉えて、往時の池泉舟遊庭園の作法を継承し「新時代の雅」として再生しました。溪谷を堰止められて造られた池庭であることが、東山界隈の池泉庭園の特徴です。その特徴を継承し、水循環の流れとして再生しました。また、平安後期の庭の特徴である蓬莱思想に由来する、2つの島と船を模した夜泊石（よどまりいし）等の石組、石橋と園路による回遊性を保全・再生しました。植栽は、外来種を除き、在来種の補植により林床を整備しました。客室棟はかつて寢殿があったであろう位置を中心に配置され、ホテルの客室やレストランテラスから、庭の全景を見渡すことができます。再生された庭園は、清らかな水をたたえ、花見、月見、雪見、茶会、酒宴等、古来より受け継がれてきた、京都ならではの都市の中で四季を愛でる庭園文化を楽しめる場となっています。



ホテルの庭として再生された池泉舟遊式庭園



### フォーシーズンズホテル京都

所在地：京都府京都市 / 敷地面積：20,443 m<sup>2</sup>  
建築設計：久米設計 / 写真：ナカサンドパートナーズ、Ken Seet・Four Seasons Hotel Kyoto

日本屈指の観光都市京都の東山にある外資系ハイエンドホテルのランドスケープ。周囲は世界遺産に囲まれ、庭園は、平家物語にも描かれている平重盛の別邸を起源とする庭園「積翠園」を現代に蘇らせた。庭園は伝統庭園としてのみでなく、ホテルのゲストサービスの場としても活用されている。

日本文化の高みの一つは「日本庭園」だと言われます。インバウンド対象のホテルで、とりわけ「日本庭園」が求められる所以です。一方でその定義を問われると、一言では語り尽せません。じっくりくのは、「作庭記」にある「乞わんに従う」、つまり自然の求めに応じて庭を作る、ということでしょう。石をその望みどおりに立てて山に見立て、砂を流して川を模す。地形を生かして滝をこしらえ、庭木の向こうの林や山並みを借景とする、という具合です。もう一つ、池を中心に据えた庭造りも「日本庭園」の特徴と言えるでしょう。

寢殿造りでは池泉舟遊式、大名庭園では池泉回遊式。前者は雅楽隊を引き連れて舟遊び、後者は庭めぐりが名所めぐりという具合に、アミューズメントの要素も重要です。さらに高度な特徴は、禅の庭園の抽象性・象徴性でしょう。そのミニマルな緊張感は、モダンデザインとの相性は良いとは思うものの、迂闊に手は出せず、本物造りのためには、技術だけでなく精神の相当な修練が必要です。最後に、維持管理の重要性を挙げます。ことに海外でそれをおろそかにすれば、立ちどころに似て非なる、日本庭園もどきになってしまいます。(植野紉)

『樂埔町』は台湾台北市に残されている日本統治時代（1895～1945）の官僚住宅を文化商業複合施設としてリニューアルした再生の庭園です。2013年に台北市文化局が行った歴史的建造物の再生事業「老房子文化運動」をきっかけとして、約100年前の施設の修復再生が数多く進みました。計画地のある台北市は亜熱帯地域で、日本本土の温帯とは気候風土、植生など環境が全く異なります。亜熱帯の自然環境下での繊細な伝統的庭園の再生に当たっては、細部まで配慮の行き届いた緻密で美しい仕上りの日本の作庭技術が不可欠だと考え、正しい日本の庭園空間への認識を広めるべく、日本庭園作庭を専門とする技術者に協力を得、設計と施工が一体となり現地で施工技術指導を行い、高品質のランドスケープ空間の創出を実現しました。また、自然環境の異なる地域での庭園の維持管理についても、現地の風土に合わせた庭園の維持管理技術指導を実施しています。当計画における、設計と施工、そして台湾と日本との協働は、日本の庭園文化への理解を促しながら、日本の作庭技術を一体的に発信していくことの可能性を予感させるものとなりました。(小池孝幸)



再生整備前の建物と庭



技術指導の風景（左：石組施工、右：植栽維持管理）



約100年前の灯籠、景石を活用し再生した枯山水庭園



### 樂埔町

所在地：台湾台北市 / 敷地面積：408 m<sup>2</sup>  
建築設計：呂大吉建築師事務所 / 写真：立信生活文化有限公司

台北市中心部に残された約100年前の日本統治時代の邸宅をレストラン、ギャラリーなどにリニューアルしたランドスケープ。アートイベントなどの現地アーティストとの連携により、眠っていたこの場所が歴史と共に新たな魅力が加えられた姿として蘇っている。